

「かみさまとりゆう」

真つ暗な風景の中で子供のこえが聞こえる。

りゆう(子) 「ねえ、かみさま、私たち、ずっと、一緒？」

静かな音楽

♪おとなの童話♪

さあ、絵本を開いて

つれていくよどこまでも

昔あなたに聞いた話の意味がやっと分かったきがするよ

今度は私が誰かに話す番

あの時はまだ幼くてただ寂しさしかなかったけれど

なんだ、そういうことだったんだね

昨日のことのように思い出す

きみと駆け回ったあの森を

これはかみさま、あなたと

小さな小さなりゆうの物語

さあ、表紙をめくってごらん

つれていくよ君の世界へ

舞台の上にはかみさま

かみさまは一つの卵を大事そうに抱えている

かみさま

「目に見えるもの、耳に聞こえるもの、その全てにやさしくあるがいい。」

「怖いこともあるだろう。驚くこともあるだろう。愛する出会いもあるだろう、苦しい別れもあるだろう。」

「その全てに、どうか、やさしくあっておくれ。」

「さて、はじめようか。」

「私はこの森のなかで、長い間一人だった。もちろん昔はここにも、妖精とか、小人とか、そんな類の人ではない、無論、動物でもない木霊のようなものたちがたくさんいたんだが、どういうわけか、だーれもいなくなってしまった。私は長いこと、ここで一人、そうずっと一人だったなあ。」

「どういうわけか…。いや、きっとわけはあるんだろう。それぞれのものが山を下りて行ったそのわけが。しかし私はその訳を聞かずにいよう。聞いてしまうと…さみしいからね。」

かみさま風をおこす

かみさま

「風、木々、花に水…ここにあるもの全てが私の化身だ。自分自身が造った森の中で、私はずっと長い間、一人だった。」

かみさま、卵をみつける

かみさま

「おお、これは…。」

かみさま

「そう、あの日、私は青く光る一つの卵と出会った。」

「…私はずっと長い間一人だった。」

「私はあの日、一つの命と出会った。」

卵は鈍く光って光を集める

かみさまのシルエットを残し、その場は暗くなる

りゆう(子) 「かみさま……かみさま……」

舞台は明るくなる

舞台にはかみさま

りゆう(子) 「かみさま」

かみさま 「なんだ、なんだ、そんなに慌てて。」

りゆう(子) 「かみさま、これ」

かみさま 「どれ？」

りゆう(子) 「こーれ」

りゆう(子) は自分の顔の一部分を隠している。

かみさま 「ほおう。」

りゆう(子) 「見たい？」

かみさま 「ああ、見たいね。」

りゆう(子) は自分の顔についたうろこを見せる

かみさま 「おお…これは。」

りゆう(子) 「えへへ。」

かみさま 「綺麗だ。」

りゆう(子) 「でしよう。さっき、水たまりに写っている自分の顔を見た。」

かみさま 「昨日降らせた雨は、水たまりを作っていたのか。」

りゆう(子) 「うん。」

かみさま 「よく水たまりに気が付いたね。えらい。」

りゆう(子) 「うん。えへへ。」

かみさま 「ほら、よく見せて。」

りゆう（子） 「はい。」

りゆう（子） かみさまに顔を近づけ、かみさまはりゆう（子）のうろこを触る

かみさま 「綺麗な…青だ。」

りゆう（子） 「青？」

かみさま 「青。美しさの中にも、冷静さを持つ色だ。心に静寂を保ち、あらゆることに揺さぶられることなく、ただただ感謝をする。それが、青だ。」

りゆう（子） 「感謝。」

かみさま 「『ありがとう』だよ。」

りゆう（子） 「ありがとうかみさま。」

かみさま 「…。」

りゆう（子） 「かみさま、ありがとう。私を見つけてくれて。かみさまが見つけなかったら、私はきっと一人だった。」

かみさま 「私がお前を見つけたんじゃない。私たちは、出会ったんだよ。」

りゆう（子） 「出会った…。」

かみさま 「お前は選んで、ここに来たんだ。」

りゆう（子） 「ふうん。」

かみさま 「お前は選んで、ここに生まれた。そして、私たちは出会うことが出来たんだ。」

かみさま 「この青はどんどん強く、そして美しくなっていくだろう。」

りゆう（子） 「かみさま、大好き！」

かみさま 「ありがとう。」

りゆう（子） 「感謝！」

かみさま 「そうだね、感謝しているよ。」

朗らかで楽しい音楽が鳴る。

りゆう（子） が元気に踊り出す。

♪一番好きな話♪

かみさまあなたはどうかやって私をみつけたの

どうやって私と出会ったの

毎日聞いているこの話

青い青い卵の話

私はこの話が一番大好き

私の足は速くなり、言葉もたくさん覚えたのに

かみさまあなたは変わらないね

どうしてだろう。

大人と子どもで生きるスピードが違うのか

それとも

あなたの時間は止まっているのか

私はこの話が一番大好き

でも、今日は…

この話には続きがあるみたい

かみさまはなにやらりゅう（子）と話をしている

りゅう（子） 「どうして？私、ずっとかみさまといたい。」

かみさま 「いずれの話だよ。だけど、私たちはしっかりと確認をしておかなくてはいけない。いずれ、必ず別れがくる。お前はいずれ、あの卵の中に帰る。」

りゅう（子） 「卵？」

かみさま 「卵の殻は肥料となる。大地を肥やし、恵みを与える。」

りゅう（子） 「…。卵。」

かみさま 「突然で驚いただろう。しかし毎日のお話には続きがるんだ。お前が生まれて、今日までの話。そして、これからどこへいくのかも、私は話してお

かないといけないんだよ。」

りゆう(子) 「…卵…」

りゆう(子) 「ちよっと待って、かみさま。私、まだ覚えているかもしれない。」

かみさま 「おお。どんなことを覚えている。」

りゆう(子) は何かを思い出す

りゆう(子) 「…あの時…私がまだ卵の中にいたあの時…確か…音がしたんだ。遠くから…でもとても力強い音。そして誰かの声が聞こえた。しつかり聞こえたよ。『大丈夫だ』って。だから私は勇気を出してこの頭で卵を破ったんだ。」

かみさま 「おお、聴こえたのか。」

りゆう(子) 「うん。しつかりと。今、思い出した。暖かい音につつまれて、私は、幸せだったなあ。」

かみさま 「…。しつかりと覚えておくといい。その言葉を。」

りゆう(子) 『大丈夫だ』…きくと、多分、もっとたくさん言葉を聞いたような気がする。…だけど、忘れてしまった。」

かみさま 「そういうものだ。卵の中の記憶を持つものは少ない。」

りゆう(子) 「私、忘れたくないよ。」

かみさま 「…青だ。」

りゆう(子) 「青？」

かみさま 「このあいだ、青のもつ意味を教えただろう。」

りゆう(子) 「…心に静寂を保ち…感謝…」

かみさま 「そうだ。不安になったとき、怖いことが起こったとき、信じる心を失いそうになったとき。水に写る自分の青を見つめるんだ。そして、心に静寂を取り戻し、感謝の心を思い出すがいい。そして、唱えたらいい。『大丈夫だ。』と。」

りゆう(子) 「かみさまは…。どうしてずっと一緒にはいられないの。」

かみさま 「私は…」

りゆう(子) 「さみしいよ。」

かみさま 「ずっと先の話だよ。」

りゆう(子) 「ずっと先。」

かみさま 「なにも怖がることはない。」

りゆう(子) 「うん…」

かみさま 「ほら、その足をどけてごらん。」

りゆう(子) 「え。…あつ。」

かみさま 「今お前が踏んだもの。」

りゆう(子) 「虫…。」

かみさま 「さきほど分かって土の中から出てきた。出てきたと思ったらお前に踏まれた。」

りゆう(子) 「…ふんじやった。」

かみさま 「虫は、大地に帰っていったんだよ。」

りゆう(子) 「ご、ごめんなさい！」

かみさま 「虫は土に戻っただけだ。『大丈夫だ。』だ。」

りゆう(子) 「大丈夫…。」

かみさま 「そう。」

りゆう(子) 「痛くなかったかな。怖くなかったかな。」

かみさま 「さあ、でももうその痛みも消えている。土に戻り、また新たな準備を始めている。」

りゆう(子) 「…感謝。」

かみさま 「ん？」

りゆう(子) 「かみさま、教えてくれてありがとう！」

かみさま 「おお。」

りゆう(子) 「知ることが出来て、良かった。そして、確認ができて、良かった。」

かみさま 「おお…。」

「さあさあ、今日はまだ長い。これから何をしようか。」

かみさま 「その日もその次の日もりゆう、お前とはよく遊んだ。そしてたくさん話をした。お前は本当に素直によく話を聞いた。小さかったお前はやがて、

美しいうろこをまとい、自由にこの森を駆け抜けるようになった。」

りゆう(子)、りゆう(娘) へと変化する

りゆう(娘) はうろこが綺麗に生えそろっている。

♪

りゆう(娘) 「かみさまー！かみさまー！」

かみさま 「おお、おかえり。今日はどこまで行ったんだい。」

りゆう（娘） 「綺麗な小川を見つけたわ。」

かみさま 「小川。」

りゆう（娘） 「本当に綺麗だったの。私、今まで、あんなに水がたくさん流れているところを見たことがなかった。そうっと顔を映してみたわ。私の青、本当にたくさんあるのね！水たまりじゃよく見えなかったから…。私、見とれてしまったわ。自分の顔なのに…。あんな素敵な場所、今まで知らなかった。ねえ、かみさま、どうして今まで教えてくれなかったの。」

かみさま 「さて、小川…。その場所は私は知らないし、行ったこともないね。」

りゆう（娘） 「あの大きな木の向こう。小さな原っぱを抜けて、思いっきり走って行ったその向こうよ。」

かみさま 「ほう。もうそんなに大きくなっているのか。」

りゆう（娘） 「なにが。」

かみさま 「いや、森がね。」

りゆう（娘） 「そうよ、この森は広いわ。本当に、とっても広い。」

かみさま 「とっても広いのか。」

りゆう（娘） 「ええ。ねえかみさま、あそこはとってもいいところなのよ、かみさまも今度連れて行くわ。」

かみさま 「そうだな、今度。」

りゆう（娘） 「きっとかみさまも気に入るわ。」

かみさま 「気に入ると思うよ。」

りゆう（娘） 「かみさま、今日は私、とてもいいことを思いついたの。」

かみさま 「ほう。」

りゆう（娘） 「とても、素晴らしいことよ。」

かみさま 「聞こうじゃないか。ふふふ。」

りゆう（娘） 「どうして笑うの、かみさま。」

かみさま 「昔はね、私が毎日いろんな話をしてお前に聞かせたものだった。お前は本当によく聞いた。」

りゆう（娘） 「今でも聞くわ。」

かみさま 「いや、そうじゃない。今のお前が聞かない子だと言っているのではない。どうやら私たちはだんだんと立場が逆になってきたようだ。」

りゆう（娘） 「私がおしゃべりだって言いたいのね。」

かみさま 「楽しんでるんだよ。今度は私が、お前の話を。」

りゆう（娘） 「あははは。」

かみさま 「ははは。」

森には二人の声が響く
森には二人しかいない

りゆう（娘） 「この森は、本当に静かだね。」

かみさま 「静かだ。」

りゆう（娘） 「私たちの声しか聞こえない。」

かみさま 「そうだな。」

りゆう（娘） 「ねえ私、思ったの。かみさま、いつだったか教えてくれたじゃない。この森には昔、たくさんの生き物がいたって。」

かみさま 「ああ、そうだったね。」

りゆう（娘） 「私、今でもどこかにいるような気がしてならないの。」

かみさま 「ほう。」

りゆう（娘） 「私、小さいころに、虫を踏んだでしょう。」

かみさま 「おお…よく覚えてるね。」

りゆう（娘） 「確かここ、この辺りでふんずけたの。かみさまが足をどけてごらんって。…そう、私、確かにあの時、小さな虫を踏んだのよ。分かって土の中から出てきたあの虫を。」

かみさま 「本当によく覚えているね。」

りゆう（娘） 「だから、良く考えてみて、かみさま。きっと、この森には他にも生き物がいるはずなのよ。そうでしょう。」

かみさま 「なるほど。」

りゆう（娘） 「あの虫は…確か丸かったわ。黒くて…丸くて…いや茶色だったかしら…ああ、よく思い出せない。私、あれから虫を見ていないのよ。」

かみさま 「…。」

りゆう（娘） 「でも、確かにいたはずなの。だって、私、本当に悲しかったんだもの。悲しくて、踏んでしまっただけで…。そしたらかみさまが『大丈夫だ』って。」

かみさま 「…。」

りゆう（娘） 「そう。それから私、その虫のことをすっかり忘れていたの。本当になんてやつなのかしら、私。自分で踏んでおいて、忘れるなんて。でもね、かみさま、私思い出したの。今日、小川のほとりに座って、土を眺めていたら。思い出したの。」

かみさま 「そうか…。」

りゆう（娘） 「土に感謝したわ。それから小川にも。思い出すことが出来て良かった。本当によかった。」

かみさま 「なるほど、それで。」

りゆう（娘） 「それでね、私、思ったの。確かにあの時、生き物がいたんだから、きっと今でもどこかにいるんじゃないかって！だってかみさま言っていたでし

よ、『虫はまた新しい準備を始めているんだ』って。」

かみさま 「なにもかも覚えてるんだね、お前は。」

りゆう（娘） 「だって私、かみさまのお話大好きなもの。」

かみさま 「それはうれしいよ。」

りゆう（娘） 「だから私、今日から探すことにしたわ。」

かみさま 「何を。」

りゆう（娘） 「生き物をよ！この森にいる私たち以外の誰か。」

かみさま 「それは…。」

りゆう（娘） 「きつと、どこかにいるはずなの。そして、見つけたら、私は友達になりたいの。」

かみさま 「…。」

「…！違うのかみさま、かみさまのことは大好きよ。かみさまと出会わなかったら、私は本当に一人だったもの。でも、この森は本当に広いのよ。本当に。きつとまだかみさまも知らない場所がたくさんあるわ。だからきつと、どこかにいるはずなの。そして私はその生き物と友達になりたいの。だから…！」

♪きつと♪

きつときつと

どこかにあなたは隠れていて
私が来るのを待っているのね

土の下、木の葉の下、小川の中かもしれない

生きるってすごいこと魔法みたい

その奇跡を見つけてみたい

初めての言葉は何にしよう

きつときつと言葉もでないでしょう

それでも私は決めたの

一目あなたに出会うため

もしかしたら奇跡かも

友達以上になれるかも

きつときつと

どこかにあなたの住みかがあるはず

私がくるのを待っているのね

かみさま 「なるほど。そうか。」

りゆう（娘） 「私、明日もう一度小川の方まで行くわ！」

かみさま 「小川。」

りゆう（娘） 「あの場所には何かがあるような気がしてならないの！」

かみさま 「気を付けるんだよ。」

りゆう（娘） 「かみさまは一緒に行かないの。」

かみさま 「私は遠慮しておくよ。」

りゆう（娘） 「そう…。」

かみさま 「お前の好奇心を邪魔しては悪いからね。」

りゆう（娘） 「楽しみだなあ。」

りゆう（娘） 寢床へ

かみさまは一人

かみさま 「小川か…。」

♪

かみさま、絵を描きだす。ああでもない、こうでもないと言いながら。

徐々に暮れる日

夜になっても描き続けるかみさま

かみさま 「ほら。」
かみさま 「お前はずいぶんと、女らしくなったね。」

やがて明けてくる日

りゆう（娘） 「かみさま——！かみさま！大変！」

かみさま 「どうした。もう出かけていたのか。」

りゆう（娘） 「そうよ、夜が明ける前に出掛けたわ。そしてもう、帰ってきたのよ！」

かみさま 「それは…とても早い、とてもとても早い。」

りゆう（娘） 「私、早起きは得意なもの。」

かみさま 「それで、無事に小川にはたどり着いたのかい。」

りゆう（娘） 「ええ。たどり着いたわ。そして私…。出会ってしまったの。」

かみさま 「そのようだね。」

りゆう（娘） 「明日、もう一度いってみてもいいかしら、かみさま。私、びっくりしてしまって…。後ろ姿しか見ていないのよ。」

かみさま 「ああ、いいとも。」

りゆう（娘） 「綺麗な白い尾が見えたわ。本当に綺麗だった。」

かみさま 「お前のその青も、本当に綺麗だよ。」

りゆう（娘） ほほえみ、姿を消す

かみさま 「私も、もう後には引けないね。…目にうつるもの。耳に聞こえるもの。お前はすべてのやさしい娘となった。」

♪

「お前は次の日も、その次の日も、小川へ出かけた。まるで日課のように、私は帰ってきたお前の話を聞いたね。小川のほとりの木の根っこにある洞穴には白いりゆうが住んでいて、とても綺麗な長い尾を持っているそうだ。そのりゆうとの出来事を、お前は毎日私に詳しく聞かせた。初めて見る自分と私以外の誰かに、お前の興味は注がれていったんだね。お前に友達が出来たことに、私は単純にうれしかった。」

それは、いつかの夜更け

りゆう（娘）

「かみさま…。」

かみさま

「おお、まだ起きていたのか。」

りゆう（娘）

「あのね、私、言いたくないの。なぜだか、言いたくないの。私だけの秘密にしておきたいの。」

かみさま

「どうした、寝ぼけているのか。お前だけの秘密だって？」

りゆう（娘）

「そうよ、こんな気持ちは初めてなの。」

かみさま

「やっぱり、寝ぼけているんだね。」

りゆう（娘）

「寝ぼけてなんかいないわ。私、今日の私のお話は、とても短かったでしょう、かみさま。」

かみさま

「ああ、確かに、短かったかもしれないねえ。」

かみさま

「…今日はどこまで行ってきたんだい。」

りゆう（娘）

「どこって、いつもの小川よ。」

かみさま

「小川のほとりで、いつものように話をしたんだろう。」

りゆう（娘）

「そうよ、嘘じゃないわ。でもね、今日はそのお話の内容を、そのときの私の心情を、かみさまに言いたくなかったの。」

かみさま

「なんだ、そんなこと。そんなことで起きてきたのかい。いいんだ。全ての出来事を私に話す必要はない。ゆっくりお休み。」

りゆう（娘）

「ちがうの。かみさまには全てを話したいの。だって私、かみさまのことが大好きだから。隠し事はしたくないの。でも、でも、私…秘密が欲しい
と思ってしまうたの。なんだかおかしなの。」

かみさま

「…なるほど。」

りゆう（娘）

「こんな気持ちになるのは初めてよ。何なのだろう、この気持ち…。かみさま。」

かみさま

「良い、良い。夜更けに興奮するんじゃない。ゆっくり休むんだ。それともここでもう少し、私と話をするかい。」

かみさま

「どうした…初めての友達は、刺激が強すぎたのか。」

りゆう（娘）、口を閉ざし奥にひっこむ

「あの様子は…いや、違う…。まさか…。なんだ、なるほど…。そうか。お前は私の知らないうちにずいぶん成長したようだな。…その白いりゅうに、恋心を抱いてしまったのか…。」
「いけない。」

かみさま、描いた絵を消しだす。

かみさま 「いかん、いかん。このままだと、全てを知る前にあの子が傷ついてしまう。」

「これで、良し。」

♪きつと♪(リップ)

りゆう(娘)、美しく舞う。

その頬は赤く、恋をする娘の舞である。

りゆう(娘) 小川へいき、白いりゆうを探す。

忽然と姿をけしたりゆう。

りゆう(娘) は驚き、慌て、悲しみに暮れる。

りゆう(娘) 「かみさま!!かみさま——!!」

かみさま 「どうした。」

りゆう(娘) 「いなくなっちゃった。」

かみさま 「…また、会いに行ったのか。」

りゆう(娘) 「そうよ。私たち毎日同じ場所で会うの。」

かみさま 「なるほど。」

りゆう(娘) 「いないなんてこと今までなかったわ。『また明日ね』って言って別れたのよ、昨日。」

かみさま 「……。」

りゆう(娘) 「かみさま。」

かみさま 「……。」

りゆう(娘) 「何か知っているの、かみさま。」

かみさま 「……。」

りゆう(娘) 「知っているのね、かみさま。何を、何を知っているの。」

かみさま 「よく、聞きなさい。」

りゆう（娘） 「会えるわよね、私たち、また会えるわよね。」

かみさま 「私たちは、大切なことを確認しておかなくてはいけない。」

りゆう（娘） 「私やっぱり、聞きたくないわ。」

かみさま 「聞くんだ。」

りゆう（娘） 「…。」

かみさま 「聞きなさい。」

りゆう（娘） 「分かった。聞くわ。でも、その前に聞かせて、私は、あの白いりゆうにまた、会える？」

かみさま 「それなら聞こう私も、お前の秘密とはなんだ。」

りゆう（娘） 「…！」

かみさま 「…。今、お前のなかにあるもの。その心情を言葉に出来るか。」

りゆう（娘） 「それは…。」

かみさま 「言葉にしてごらん。お前にはたくさん言葉を教えたよ。」

りゆう（娘） 「…。私と白いりゆうは、いろいろなことを話したわ。昨日の話、明日の話、お互いの話。青と白の話。」

♪青と白♪

初めて会った日

あなたは水を飲んでいた

今でも覚えているわ、綺麗な白が水に濡れていた

次に会った時

振り返り微笑んでくれたね

私は踵を返して走ったけれど

本当はとても嬉しかったんだ

「嬉しかったよ」とあなたに告げたとき

今までにない衝動が走った

私は触りたくてたまらなくなった

あなたのその白に触ってみたい

それからいくつもの時が流れて

私たちは近くなった

青と白はいつまでも自由で

どこまでも飛んでいける気がした

今でも最初の日を覚えている

綺麗な白が水に濡れていた

りゆう（娘） 「この心情を表す言葉……。表す言葉を、私は知らないわ。」

かみさま 「なるほど。私は分かったよ。よく、聞いてくれるかい。優しい子よ。」

りゆう（娘） 「いやよ。」

かみさま 「なんだって。」

りゆう（娘） 「かみさま、私、聞くのが怖い。」

かみさま 「この森には、」

りゆう（娘） 「…聞かなきゃだめ？」

かみさま 「この森には、」

りゆう（娘） 「…。」

「この森には…もう、私とお前しかいない。」

りゆう（娘） 「白は去ってしまったの。」

「それとも私が見たのは幻だったの。」

「その、どちらともだ。いずれにしても私は教えなくてはいけない。お前はもう、二度と、あの白いりゆうには…」

りゆう（娘） 「言わないで！」

「お前はもう、白いりゆうには二度と会えない。」

「嘘よ、嘘、嘘。絶対に嘘。どうしてもそんな嘘をつくの。こんな、怖い嘘をつくの。私は…こんなとき、何に感謝をしたらいいの。とても悲しいわ。とても。」

「思い出すんだ。心に静寂を保ってごらん。」

「…思い出せないわ。なぜかしら。かみさま。私今までのかみさまの言葉が何も思い出せない。こんな時、どうしたらいいの。思い出せないわ。」

りゆう（娘）

かみさま 「思い出せないのか。」

りゆう（娘） 「だって私、こんな心情に出会ったことが、今まで一度もないんだもの。」

かみさま 「思い出せないのか。」

りゆう（娘） 「…私、探しに行くわ。ねえ、かみさまお願い。もう一度だけお願いをさせて、ねえ、白いりゆうにもう会えないなんて、そんなこと嘘だと言って。」

かみさま 「…。」

りゆう（娘） 「ねえ、何とか言ってみて。」

かみさま 「落ち着いて聞きなさい。」

りゆう（娘） 「何を？」

かみさま 「いいから。」

かみさま 「…私が今まで、お前に嘘を言ったことがあったかい。」

りゆう（娘） 「…。」

かみさま 「この森にはもう、私とお前しかいない。」

りゆう（娘） 「…。」

かみさま 「…。」

りゆう（娘） 「私は…見つけるわ。」

りゆう（娘） かみさまの制止を押し切って走り去る

かみさま 「本当に可哀想なことをしてしまったね。お前は、“恋”という言葉覚えてる前に“恋心”に出会ってしまったんだね。かわいそうなりゆうよ。それでも、すべてを知るよりはよかろう。」

「あれから、お前は姿を消した。この森から出て行った。この森の外、そう宇宙へ走り去っていった。」

「この森は、宇宙の中に浮かんでいる宇宙船のようなものだ。この閉ざされた空間から解放されて、お前は今、さぞ自由だろう。もしかしたら、新しい友達にも会うことができたかも知れないね。私はまた一人になってしまったが、あれで良かったのか、私は今もまだわからないでいるよ。」

♪風♪

かみさま 「おお、そうだった。そうだった。風はまだ、ここにおったね。草木も、花も、全てがここにはある。たくさんの命に私は囲まれている。」

「いろいろなものを作り出してはみたが：果たして何が必要だったのか、わからなくなってきましたね。全てのものには終わりがくるからね。」

「りゅうよ、元気にやっているか。きっと、色々なものを見ているのだろうね。お前の好奇心は果てしない。飽きることを知らない子だからね。たくさんの言葉を知り、技術を身に付け、学ぶ喜びを知ったのかも知れないね。今のお前ならわかるかもしれない。ここには虫や、白いりゅうの他にも、風も、木も、草花もある。あの小川だって息をしているんだ。：私のごとは、もう忘れただろうか。忘れたかも、知れないね。」

「りゅうよ、元気にやれよ。このままいくとやがてこの森もなくなるだろう。りゅうよ、元気にやれよ。」

「りゅうよ、思い出したかい。宇宙からこのまあるい森を見て、思い出したかい。」

♪ミルキーウェイ♪

昔きみに聞いた話の意味がやっと分かったきがするよ
今度は私が誰かに話す番

あの時私はまだ幼くてただ寂しさしかなかったけれど
なんだ、そういうことだったんだね

広い宇宙に出た私は

たくさんの星屑に出会ったよ

いくつものトンネルを潜り抜けて

やってきたのは大きな海だった

ミルキーウェイ この道を行くと

ミルキーウェイ 多分行き止まり

ミルキーウェイ 多くの生き物にあっただけど

ミルキーウェイ かみさまはあなた一人

さよならは悲しい言葉ではない

きっと全てはこの宇宙につながっているから

ミルキーウエイ かけがえのない森

ミルキーウエイ こうやって外からみると

ミルキーウエイ また会えるかしら

ミルキーウエイ かみさまはあなた一人

ミルキーウエイ なんだか思い出した気がするよ

かみさま 「あの日から誰もこの森に姿を現さない。」

「さみしいなあ。とてもさみしい。…りゆうよ、私は昔、お前に教えたね。お前はいつか、あの卵にかえる、と。そしたらお前は卵の中の記憶を私に話してくれたね。今でも、私は覚えてるよ。遠い昔、お前が卵の中で聞いたあの言葉を。」

「お前はいつか、あの卵の中に帰る。お前だけじゃない。この草も枝も、全てのものは大地へ帰る。私はその節理を受け入れなければならない。」

「…かみさまは歳をとらないって？いいや。とっているよ。ゆっくりと、ゆっくりとね。この森と共に。少しずつ体力も衰え、足取りも重くなった。私だって歳をとる。…だけど、私がゆっくりと歳をとっている間に、この森からみーんなくなってしまう。」

「私はまだこの森で待っているのかも知れないね。」

「さて、今日ももてなしの準備をしようかね、いつ、誰が訪ねてきてもいいように。」

懐かしいメロディが聴こえ

昔いた様々な生き物たちが姿を現す

がしかし、それらは全て幻であり

最後にはかみさま一人が残る

♪森のかみさまの話♪

それでは、始めましょうか
かみさまは一人で住んでいた
昔は妖精とか、小人とか
そんな類の人じゃない、動物でもないものが、この森にも居たのに
今はもう、かみさま一人

誰も居ない森の中で毎日
もてなしの準備をするかみさま
いつかやってくる、そう、隣人の存在を信じて

時には笛を鳴らし、時には詩を詠み、時には歌を歌い、ずっと待っていた

ある日、その客人は突然やってくる

曲が終わりふと顔をあげるとそこにはりゆう（大人）の姿がある

かみさま 「…。お前？」

りゆう（大人） 「…。」

かみさま 「りゆう…。なのか。」

りゆう（大人） 自分の顔にあるうろこを触る

かみさま 「おおお。この青は、まさしく。」

「お前は…戻ってきたのか。おかえり。」

「青が、青がより強く美しくなったな。お前は美しい、立派な大人になったんだな。」

りゆう（大人） はその場から動こうとしない

かみさま 「おかえり。りゆうよ。外は、外は、宇宙は、広がっただろう。宇宙からこの森を見たか。この森は、美しかっただろう。」

♪青龍♪

大きな音がしてりゆう（大人）の体が動く

それはまるでロボットのように不自然である

徐々に森を壊していきりゆう（大人）

加わりりゆう（子供）とりゆう（娘）

♫頭は「頭の大きなりゆうとなり、かみさまにも襲いかかろうとする

かみさまは落ち着いてりゆう（大人）の動きに心を痛めている

かみさま 「…何故壊すのか。どうして怒るのか。木も草も小川も花たちも、みんな機嫌よく幸せに暮らしているじゃないか。何も荒ぶることはないさ。こ

こは、私たちの森だよ。」

自らが壊した森を見つめるりゆう

かみさま 「話そう。昔みたいに。お前にあ沢山の言葉を教えたよ。」

りゆう（大人）はさっと身を隠す

かみさま 「きっとお前はまた戻ってくる。なあに、待つのは慣れてるさ。その間にお前が壊したこの森を、直しておこう。」

りゆうの壊した森を直しだすかみさま

かみさま 「もう何年も、本当に何年も大昔だからな。ここでお前と私がともに暮らしていたのは。戸惑うのも無理はない。しかし、お前はここへ、この森

へ戻ってきた。私は嬉しい。感謝だ。感謝をするよ、りゆうよ。さあ、思う存分この森を駆け回ったら、私のところへおいで。またともに話そうじゃないか。私はお前に聞きたいことがたくさんあるよ。宇宙はどうだった。星には会ったか。月は優しくかったか。宇宙からみた、この森は

どうだったか。宇宙から、私は見えたか。ああ、もう一度お前と話ができるなんて、思っていなかったよ。」

りゆう（大人） そつと姿を現わす

かみさま 「やはり戻ってきたか。ほらごらん、森は少し直ってきた。大丈夫だ。…久しぶりだな。」

りゆう（大人） 「…。」

かみさま 「よく戻ってきたな。」

りゆう（大人） 「…。」

かみさま 「おかえり。」

かみさま 「…なに。」

「りゆう。私の言うことがわからないのか。」

「なるほど、お前は言葉を捨てたのか。」

♪一番好きな話♪（リップ）

りゆうの体が動き出す

これまでの出来事を説明するかのよう

かみさま、りゆうの全てを理解する

曲が終わり、りゆうはそつと森から身をひこうとする。

かみさま 「りゆうよ。…大丈夫だ。」

「私は、お前が言葉を捨ててくれて、とても嬉しい。」

かみさま 「大丈夫だ。この広い宇宙の中で、私たちは永遠に自由だ。」

「言葉は、道具ではない。道具はいつか捨てる時がくる。全てのものは大地にかえるんだ。そうだろう。道具は持って帰れない。この森にあるもの、これらはすべて、私が創り出した。そうだ、私の一部だ。すべてが私の化身だ。木も川も、草も花もね。虫だって、あの白いりゆうもさ。」

りゆう（大人） 「…。」

かみさま 「それがなんだっていうんだい。お前は戻ってきた。道具を捨てて。さあ、戻ろう、私たちの森へ。お前が生まれた森へ。」

りゆう（大人）は、かみさまに近寄ったり、自ら離れたりを繰り返す

かみさま 「怖いものをみたんだね。宇宙から、怖いものをみてきたんだね。外からこの森をみて、お前は何を感じたんだ。」

りゆう（大人） 「…。」

かみさま 「…そうか。お前は、この森のすべてをみたんだね。今、未来、そして過去も。すべてを見てきたんだね。」

「そうだ。この生き物たちはみんな、旅立ってしまった。小さい争いも大きな争いもあったが、どれも無意味なものだった。争わずとも、我々はゆっくりと年をとっているのね。」

りゆう（大人） 「…。」

かみさま 「なあに、私も速度は遅いがゆっくりと確実に年を取っている。いつまでもこの森があるわけではないんだ。それに気付くことの出来ない生き物たちが、争いを繰り返す。そしてこの森を去っていく。この森もいつかは終わりが来るさ。46億年の歴史にもいつかは別れがくるのさ。」

りゆう（大人） 静かにかみさまに歩み寄る

かみさま 「お前は、私の話がよくわかるようになったね。」

りゆう（大人） かみさまの腕に顔をうずめる

かみさま 「大丈夫だ。」

大きなハグ

大きな愛

愛に包まれる瞬間

♪おとなの童話♪（リップ）

かみさまの腕をすり抜けていくりゆう

自由に飛んでいく

かみさま 「大きな愛があれば。大丈夫だ。もう忘れるな。大丈夫だ。」

かみさま 「帰ろう。いつか終わりがくることを噛みしめながら。帰ろう。いつか別れがくることを噛みしめながら。それでもここに居る尊さを喜んで、ともに歩もう。大丈夫だ。お前がどこに居ようが、森の中であるうが、外であるうが、どこに居たってお前はいずれ大地に帰る。そして私は必ず、その日を見届ける。すべてを受け止めた後でしか、私はいなくならないよ。大丈夫だ。」

発行元 せんすおぶわんだあ

発行日 2017年9月17日

ご利用について

作品の上演などについては、WEBサイトのコンタクトよりお問い合わせください。

著作権は せんすおぶわんだあ に帰属します。

*本書の内容は予告なしに改訂となる場合があります。

WEB サイト せんすおぶわんだあ

<https://www.sens-of-wonder.com>

Twitter

@Sens_of_wonder